

向のケビキを施し、外面を平滑に整形したスタンダードな資料である。大沢谷内遺跡における上記のような状況を考慮した場合、この資料もまた遺跡内で製作されたことも考えられる。こうした想定が妥当であるとすれば、周辺遺跡から出土した同一形態の製品が本遺跡で製作された可能性も生じてくる。越後平野周辺における曲物の製作・流通を考える上で端緒となりうる資料としてSE418出土の曲物を位置づけたい。

第3節 アスファルト塊をめぐって

遺物包含層にあたるⅢ層と遺構内から、古代から中世に属すアスファルト塊が大量に出土した。総重量にして3.76 kgにのぼり、823m²たらずの調査区域からの出土量としては特筆に値するものである。

第VI章で述べたように、出土したアスファルト塊は大小さまざまなサイズからなる。いずれも不整形な形状をなし、中型～大型個体では厚さ1cm～3cm台の偏平な資料が大多数を占める。遺構に伴う資料としては、9世紀前半と推定されるSD52、9世紀後半～10世紀初頭と推定されるSD34・SX29、SE389、13世紀代のSE389・SE418などから出土し、本次調査区における古代・中世の全期間にわたり存在することが確認できた。

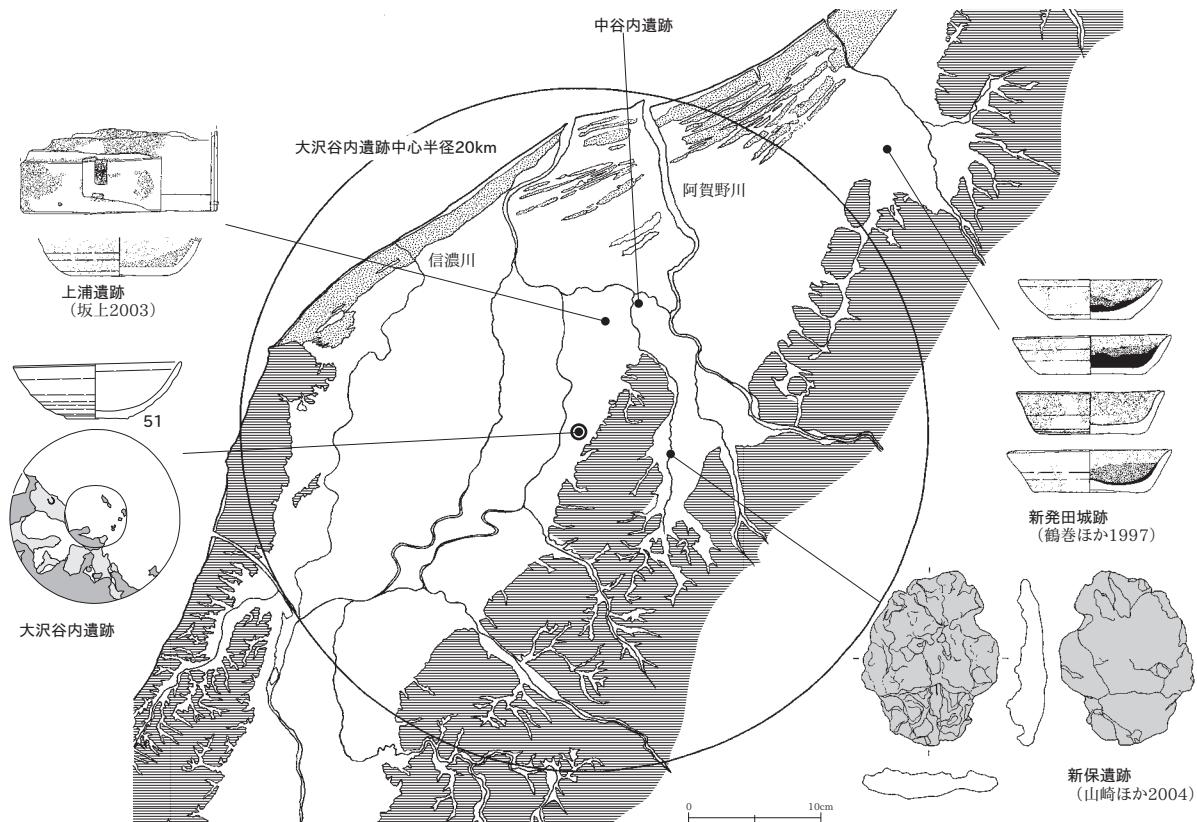
今回の調査では微細種実の採取を目的とした土壤水洗を5箇所の遺構覆土で行い、これらの全てから微細なアスファルト粒子が多量に検出された。調査区の広い範囲に微細なアスファルト塊が分布していたことをうかがわせるとともに、この近辺に原油が湧出し、自然生成したアスファルトが各所に放置または廃棄された可能性を強く示唆している。

多量に出土したアスファルト塊のなかでとりわけ重視されるのは、井戸の中からまとった資料が検出されたSE418でのあり方である。この井戸は下部に4個体にのぼる曲物が埋設されており、曲物上面から最下部に至る土砂内を中心に337gのアスファルト塊が堆積していた。曲物内部の自然堆積土からは、木片・炭化物・微細種子も出土した。こうした状況に基づけば、この井戸は機能時に開口しており、アスファルト塊が絶えず落下・堆積する環境に置かれていたのであろう。予想される水質や4個体もの曲物を使用した入念な作りから見て、飲料水や農業用水などの確保を目的に利用した施設とは考えにくいところである。

SE418の性格を考えるうえで、中段から確認された木羽板層（第16・18層）は少なからず重要である。それらは曲物の上面周囲を取り巻くように2層にわたり堆積し、人為的に敷かれた状況を示していた。木羽板の分布範囲は幅30cm～40cmのテラスをなしており、何らかの作業が可能な広さをもつ。同層におけるアスファルト塊の推定堆積量は300g以上にのぼる。アスファルト塊は埋積土の上部からも出土した。しかしその量は20gにすぎず、井戸内部のアスファルト塊の大半が木羽板層で自然生成したことをうかがわせる。本次調査区では、石油に由来する黒色付着物が土師器無台碗で確認された。この中には外部に流出した状態で付着するものがあり（図版25-51など）、原油の利用が遺跡内で行われていたことを明示する。ここに列記したようなことがらを考え合わせるならば、この井戸では当時原油が湧出していた可能性が高く、その採取を行う「油井」として機能していたことも十分考えられる。

越後平野の周辺では、古代・中世に属すアスファルトの出土がいくつかの遺跡で確認されている。本遺跡の2008年調査区では、古代・中世の井戸などからアスファルト塊が確認され、中世の井戸から出土した漆器碗にはアスファルトが付着していた。新津丘陵東麓の沖積地に位置する五泉市新保遺跡では、古代の土坑内から扁平なアスファルト塊が出土した〔山崎ほか2004〕。本次調査区出土資料と形状が酷似するものである。本遺跡の北9kmの沖積地に立地する秋葉区上浦遺跡では、古代の井戸からタール状の原油が湧出していた。井戸側に利用された曲物や井戸の中から出土した漆器碗にもそれらが付着することから、油井の可能性が指摘されている〔坂上2003〕。このほか、上浦遺跡に近い中谷内遺跡では石油臭をとどめるタール状物質が須恵器長頸壺の内部に付着していた〔立木ほか1999〕。

以上のように、新津丘陵周辺に分布する古代・中世遺跡では、石油に関連した資料が徐々に増加しており、その



第27図 越後平野周辺における古代・中世の石油関連資料

利用が一般的に行われていたことをうかがわせる。しかし、越後平野周辺における石油資源の使用状況については現時点では明らかでない。今後は古代・中世土器の内・外面に残るタール状付着物の検討をつうじ、新津丘陵産石油の流通実態を明確にしていく必要がある。

ところで、大沢谷内遺跡では2009年の調査に際し、縄文時代晩期に遡るアスファルト塊が大量に出土した。これらは本次調査で出土した資料に形状が酷似する。同地区では掘立柱建物の一部をなした打ち込み柱の下端からもアスファルト塊が出土しており、本次調査区と同様に原油が周囲に湧出していたことをうかがわせる。内部にアスファルトが付着した土器が出土したことからも、遺跡内で石油資源の利用が行っていたことは確実である。2010年調査区の晩期終末集落や北150mに位置する晩期中葉の大沢谷内北遺跡とともに、各地区は「交易拠点」的な色彩が強く〔前山2010・2011〕、アスファルトの流通において中核的な役割を担った遺跡と考えられる。その後の大沢谷内遺跡では、弥生・古墳時代の集落が未だ確認されていないが、限定された調査範囲を考慮すれば、中世に至るまで利用地点を変えながら連続と営まれた可能性がある。さらには、石油資源の利用もまた継続的に行われていたことも想定できる。

大量のアスファルト塊が出土した2009年調査区の上層には、飛鳥～奈良時代の集落が形成されていた。各種祭祀具や円面鏡・九九木簡を伴う点から官的色彩をもつ遺跡とみられ、越後平野の周辺では現時点において数少ない7世紀代の集落もある。この集落では、各種木製品の製作が行われていた。井戸の中には丸木舟を転用するものがあり、当時存在した「渟足柵」に内水面経由で物資を供給する手工業生産基地として機能した可能性も指摘できる。これに関連して注目されるのは、天智7年(668)年に「越国」から「燃水・燃土」が献上されたという『日本書紀』の記述である。献上地の所在場所については諸説をみると、具体的な根拠に基づく立論には至っていない〔新潟市2008〕。大沢谷内遺跡からえられた一連の知見は未だ断片的な情報にとどまるものであるが、献上地の所在をめぐる問題を大きく前進させる重要な資料を提供することになる。